

國學院大學學術情報リポジトリ

〔実践報告〕 『山月記』を「人虎之交」で読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 正一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000892

〔実践報告〕

『山月記』を「人虎之交」で読む

渡辺 正一

一 はじめに

―「忘形之友」と「人虎之交」―

『人虎伝』の「忘形之友」を「人虎之交」としたのは私の思いつきにすぎない。「管鮑之交」や「刎頸之交」からの発想であるのは勿論だが、「人」と「虎」との「交わり」という語については見たことがない(出典や使用例をご存じであれば教えて戴けると大変有難い)。無論のこと『山月記』は『人虎伝』の現代語訳ではないが、李徴と袁慘との交際も・李徴内部での葛藤も、「人」と「虎」との「交わり」といって良い。カフカ『変身』からの「変身譚」として読まれることの多い『山月記』を、「人虎之交」という切り口で読解する試みが本論考である。

「人虎之交」なる語を思い付く切っ掛けとなったのは、昨年六月の國學院大學中國學會第五十九回大会における、川

合康三先生の唐代詩人についての御講演「山と向き合う」である。「李徴は何と向き合っていたのか」という疑問がその出発点となった。折から非常勤の高校で三年連続『山月記』の授業をし、もう一つの高校の教科書には『唐人説薈』の『人虎伝』が採用されていた。また、「教科書評価問題集」の改訂作業中で「友情(松浦友久『漢詩 美の在りか』岩波新書)」を仕上げたばかりの時でもあった。そんな偶然が重なって、『山月記』を「人虎之交」という視点で読み直してみたのである。

- 1 李徴はなぜ「虎」になったのか
- 2 李徴はなぜ「詩人」になれなかったのか
- 3 李徴はなぜ「詩人」になったのか

この読み尽くされ語り尽くされて、なお「解答」の出ていない『山月記』の難問に「人虎之交」で挑んでみた。本論考はその教材分析・作品研究である。

二 友情文学としての『人虎伝』

『人虎伝』に特徴的なのは、「忘形之友」という「濃密な」男性間の「友情」である。『山月記』創作の元となった『人虎伝』は、『太平広記』系『李徴』と『唐人説薈』系『人虎伝』に大別される。駒田信二氏は『ユリイカ』第九卷第九号『山月記』の詩についての中で、「中島敦は『唐人説薈』系統によった」『国訳漢文大成』本で『人虎伝』という小説を読んだことによって『山月記』を書くことが出来たのである。もし『太平広記』で読んだなら、あるいは『山月記』は出来なかったかもしれないし、出来たとしても多少形のちがったものになったかもしれない」と述べている。卓見だと思う。『唐人説薈』本には、『太平広記』本にない、例の「即席の詩」があり、その「詩」こそが『山月記』最大の創作「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」に繋がっているからである。中島敦が『山月記』創作にあたり典拠としたのは、『太平広記』系の『李徴』ではなく、『唐人説薈』系の『人虎伝』である意義は大きい。

『詩経』「伐木」をはじめ「友情文学」は漢文学特有の一分野である。ましてや『山月記』の中核は「詩」である。『漢詩』の主題を大まかに類別してみると、比較文学

史的に見て最も特徴的に感じられるのは、男性間の「友情」に関わる作品の多さという点である。これは、とりわけ日本の『和歌』の主題に男女の「恋」に関わる作品が多いことと対照的であるが、例えば『世界名詩集』の類いを概観してみても、中国の古典詩ほど濃密な友情がうたい上げられている作品を数多く見いだすことは、困難だといつてよい（前出『漢詩 美の在りか』）。また、『人虎伝』について『新釈漢文大系 唐代伝奇』には、「一面、友情の文学であり、また中国古代知識人の不遇に耐えきれなかった悲しい姿を描いたものである」とある。私は『人虎伝』を袁孝と李徴との「人」と「虎」との「交わり」を描いた作としておもしろく読んだ。

次に『国訳漢文大成』本『人虎伝』を、『山月記』と照らし合わせ、段落ごとに「李徴と袁孝の友情」という角度からまとめてみた。もちろん『山月記』は中島敦の創作なので、『人虎伝』の段落構成とは一致しない部分がある。しかし逆にそれが『山月記』読解のヒントにもなる。

なお『人虎伝』・『山月記』の段落構成については、過去三カ年採用した『現代文B』の教科書および指導書（三省堂・東京書籍・数研出版）、『古典B』教科書および指導書（大修館書店）を参考にした。（『人虎伝』の引用はすべて『国訳漢文大成』からのものである）

◎「人虎伝」段落構成

【第一段落】〈「人虎之交」序章〉

『李徴の発狂と失踪』

第一段落における最大の特徴は「故人」袁徴が登場しないことである。李徴は袁徴不在の中、「間適し、人と通ぜざることを歳餘に近」い生活をした後、「衣食に迫られ」再就職を「干む」。そして、「汝墳逆旅」で「疾を被りて發狂し」「狂走」し「虎」になったのである。

【第二段落】〈「袁徴」との「人虎之交」①〉

『李徴と袁徴の再会』

「陳郡の袁徴」と「號略に家」している「隴西の李徴」との再会の場面である。「徴昔徴と同じく進士の第に登り、分極めて深し」・「徴始め君と場屋（試験場）を同うすること十餘年、情交歡すること甚しく、他友に愈れり」・「同年に名を成し、交契深密なること常友に異れり」とある。出身地の異なる両者が知り合ったのは、地方試験の合格後、中央試験に臨むために、上京してからであったことが窺える記述である。両者の交友は「進士登第」以前から苦楽をともにした、希望に燃える若き受験生時代からであった。

【第三段落】〈「変身」Ⅱ「闇の呼び声」との「人虎之交」

〈「忘形の友」「袁徴」との「人虎之交」②〉

『虎への変身と家庭人の李徴』

袁徴の間に李徴は「疾に嬰りて發狂し」「夜戸外に吾が名を呼ぶ者」の「聲に應じ」変身した経緯を述べ、さらに「婦人」を「取りて食」い「殊に甘美」だったことまでも語る。袁徴は「久しく飢ゑて堪え難」い李徴に「餘馬一疋」「贈」ろうと申し出るが、李徴は「吾が故人の俊乗を食ふは」「吾が故人を傷る」と断る。そして、「舊文數十篇」の「傳録」の前に、李徴は「忘形の友」袁徴に「號略に在」る「吾が妻孥」の生活の世話と「我れ已に死せり」との伝言を依頼する。これに対し袁徴は、「平昔の故人」李徴に「足下と休戚同じ」「足下の子は亦徴の子なり」と応じるのである。

【第四段落】〈「袁徴」との「人虎之交」③〉

『舊文數十篇』と「即席の詩」

「吾が妻孥」の世話を依頼した、その後に、「舊文數十篇」の「傳録」依頼がある。「誠に文人の口闕に列する能はざるも、然も亦子孫に傳ふるを貴ぶなり」との後、李徴の口から出た「二十章」ほどの作は、「文甚だ高く、理甚だ遠し」。(袁徴が) 閱して歎ずること再三に至る」出来栄であつ

た。そして、「蓋し吾が外異りと雖、中異る所なきを表せんと欲す。亦以て吾が懷を道ひて吾が憤を攄べんと欲するなり」として作られたのが例の「即席の詩」である。これもまた袁修は「之を覽て驚いて曰く、君の才行我れ之を知れり」と感嘆している。

【第五段落】「袁修」との「人虎之交」④

『袁修の質問と李徴の告白』

袁修は「君の此に至れるは、君平生自ら恨むあるなきを得んや」と、「虎」への変身について思い当たる節を尋ねる。李徴は「吾れ故人に遇ふ。則ち自ら匿す所なし」として、「南陽の郊外」の「一婦婦に私」通したこと、その家人に「害」された腹いせに「風に乗じて火を縱ち、一家數人盡く之を焚殺して去」ったことを告白する。

第三段落に、「ただ行の神祇に負けるを以て、一旦化して異獸となり、人に視づるあり。故に分として見えず」とあるのが、この「焚殺」事件を踏まえた「虎」の発言である。『人虎伝』で李徴は、この「神祇」に背いた「所行」が祟ったがために「虎」に変身したとしている。また李徴が「故人」袁修との再会にも拘わらず姿を見せられない理由にもなっている。

【第六段落】「袁修」との「人虎之交」⑤

『李徴の配慮と袁修との友情』

別れに際し李徴は言う。「使して回るの日、幸に道を他郡に取れ。再び此途に遊ぶなかれ。吾れ今日尚悟むるも一日都て酔はば則ち君此を過ぐるも、吾れ既に省せず將に足下を齒牙の間に碎かんとす」・「此れ吾が切祝なり」・「此に將に君をして我を見しめんとす。勇を矜らんと欲するにあらず。君をして見て復た再び此を過ぎざらしめんとなり」。これらはすべて「忘形の友」袁修を理解しその性格を把握しきつての発言である。

【第七段落】「人虎之交」終焉とその後

『李徴との別離とその後の袁修』

「修乃ち再拜して馬に上（の）り草茅中を回視し、悲泣を聞くに忍びざる所なり。修亦大に慟き行くこと數里」、「則ち虎林中より躍り出でて咆哮し、巖谷皆震ふ」。凄絶な「故人」との別離である。『山月記』はここで終わる。

『人虎伝』は続けて、袁修「南中より回る。乃ち他道を取り復た此に由らず」、「賻贈の禮を持ち徴が子に計せしむ」、そして「遂に己が俸を以て均給」したので「徴が妻子飢凍を免る」と記してある。袁修と李徴の「人虎之交」は最後まで「濃密」である。



これが今のところの『山月記』全体読解図である。『山月記』創作の中核となるのは「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」である。これは、相反する二つの「心」ではなく、一種の対句表現ともいえる。表裏一体となった李徴の真情と読むのが自然である。これを、一方は「詩人になることを妨げた心」・もう一方は「虎に変身させた心」、などと別個の「心」として読むと読解に無理が生じてくる。

『山月記』は、「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」を中核とし、「友情文学」の流れをくむ『人虎伝』を縦糸・「変身譚」としての『変身』を横糸として織り交ぜながら、「人虎之交」を描いた中島敦の創作である。『山月記』は、代表作『李徴』に登場する司馬遷の発明した『史記』『紀伝体』、これを意識しての創作ではないかと考えている。この創作姿勢・方法は他の中島作品にも顕著である。例えば『李徴』は、前漢七代武帝を「本紀」、李徴・蘇武・司馬遷を「列伝」として構築されている。もう一つの代表作『弟子』には、「孔子という縦糸」とそれを巡る「子路たち弟子という横糸」が明瞭である。中島敦の作品が「立体的な結晶の美しさ」を持つと評される（前出『ユリイカ』p139）のは、人間を多角的に描こうとして司馬遷が編み出した、「紀伝体」という叙述方法からの影響が大きいからだと考える。

右に示した『山月記』構造図は中島敦創作による「立体的な結晶の美しさ」に対する一つの読解図式である。

四 「人虎之交」による『山月記』構成と読解

「人虎之交」とは、李徴が「虎」になっても変わらない「忘形の友」故人・袁傜との交際である。この点がカフカ『変身』のザムザと家族の関係とは大きく異なる。つまりザムザの「変身」によって家族は「変心」したが、「故人」袁傜の友情は「変わらない」ということである。

読解の方法を「内」と「外」とで整理しておく。

「内なる人虎之交」とは、「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」の、いわば如何ともしがたい「人」と「虎」との、葛藤に悶え苦しむ李徴の心理状態である。

「外との人虎之交」とは、「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」に煩悶する李徴の内面に対する外部からの二つの働きかけである。一方の「戸外・闇の中からの声」は李徴を「虎」に変身させるのに対し、もう一方の「故人袁傜の友情」は（一瞬ではあるが）李徴を「詩人」に変身させる。

『唐人説書』本を用いた『国訳漢文大成』にある『即席の詩』は、「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」という『山月記』創

作の源となった。次に、段落構成に従って中島敦の創作を多方面から読み取ってみたい。(引用はすべて本年度採用の『現代文B』(数研出版)からのものである)

◎段落構成と読解

【第一段落】〈人虎之交〉序章

『李徴の発狂と失踪』

『人虎伝』と同様、第一段落には「故人」袁傜不在時の李徴が描かれている。つまり、字面には描かれていない李徴と袁傜の「人虎之交」、「序章」である。本段落の『山月記』の創作は、李徴が「官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交わりを絶つて、ひたすら詩作にふけた」¹下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとした²ことである。

これは李徴が、官吏としての出世を捨て、「詩家としての名声」に向き合つた・「文名」に執着した姿を描いたものといつてよい。この姿は、第四段落の「旧詩を吐き終つた李徴」が「自らを嘲る」言葉に明瞭である。「今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、おれは、おれの詩集が長安風流人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ」。「今でも」と二回繰り返し、退官後

「故山、號略」でただ独り、「文名」を揚げて「自尊心の満足」に酔う夢を見ていた、そして「虎」なつても見ると強調している。この姿は『山月記』読解の重要ポイントである。この時の李徴は「文名」や「架空の読者」といつてよい「長安風流人士」に向き合つて、現実の「自己」と向き合つてはいなかつたということだからだ。李徴は袁傜不在の中、「ひたすら」「詩家としての名声」に向き合つて「詩作にふけた」。つまり「長安風流人士」の机上の詩、その代表例が「格調高雅・意趣卓逸」な「三十編」ということである。「虎榜」にも「號略」にも「虎」がいる。李徴の「内なる人虎之交」はすでに始まっていたのである。

第四段落において袁傜の読んだ「まだ世に行われておらぬ」「旧詩」が、李徴の退官後「故山、號略」での作と考えられるのは、唐代の科挙の実態が宋代以後とは大きく異なるからである。次に、村上哲見著『科挙の話』より「郷貢進士(受験生)」と「知貢挙(中央試験官)」などとの関係について引用する。

「唐代では……受験者の名前をみて、その人物について事前に得たさまざまな情報、すなわち事前に読んだその者の詩文、世間の評判、誰彼の推薦などを想起し、それらを総合して判定する。となれば、受験者の方も、試験場での

答案に一切を賭けるというわけにはいかず、事前運動が必要になってくる。「目上の人に詩文を届けて読んでもらうことを『行巻』または『投巻』というが、唐代では知貢奉はかなり早くから任命されているので、まずその人に投巻をせねばならぬ。それも一度では印象がうすいというのであるう、数日を経てもう一度届ける。これを『温巻』という。」「高官たちに平生の製作を届けて読んでもらうことを『求知己』といい、運動が成功して特別に目をかけてもらうことを『関節』という。現今いうところのコネにあたるう。」「そうなると本来の意味はどうであれ、情実、物質的誘惑、権威的压力、などによる腐敗がはいりこむことは避けがたい」。

「天宝の末年」「科挙」中央試験の受験生であった李徴も「事前運動」をしたはずである。そうしなければ、いくら「博学才穎」であつても、「若くして名を虎榜に連ね」ることも不可能な時代であつた。要するにこの時分、李徴は受験を意識せざるを得ず、その詩文は複数の人間に読まれていたということである。

しかし、李徴は「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚」い。進士登第のためとはいえ「行巻」「求知己」運動は堪え難いことだったに違いない。「物質的誘惑、権威的压力、な

どによる腐敗」は嫌になるほど見てきたであろう。上京直後から「郷党の鬼才」李徴の「自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない」。さらに「江南尉に補せられた」後にも目の前にいるのは「俗悪な大官」である。受験生の頃から「発狂」に至るまで、常に「傷つけ」られてきた「偶才李徴の自尊心」は、当然、修復と満足を求める。それが「詩家としての名を死後百年に遺」すことだったのである。

出身地・生活地の異なる李徴と袁修が知り合ったのは、地方試験の合格後に中央試験受験ため上京した「青年時代」だったことは前述した通りである。とすれば「故人」となる袁修と李徴は受験生同士「行巻」の詩文を読み合っていたはずである。そして、その時から袁修は李徴の「素質が第一流」であると感じ取っていたに違いない。「峻峭な「性情」の李徴を「我が友」にしたのは、「穏和な袁修の性格」ばかりではなく、自分にはない詩「才の非凡」を認めていたからと考えられる。同じく、「自ら恃むところすこぶる厚」い李徴が袁修を「最も親しい友」としたのも、「進士」「同年」合格ばかりではなく、「李徴詩」の得難い真の理解者として信頼していたからであろう。以後、展開される両者の「濃密な友情」は、「青年時代」受験生であつた頃から「十餘年」の、〈袁修の畏友「李徴」⇓李徴の知己「袁

「惨」という関係なくしては読み取れない。

【第二段落】「外」Ⅱ「袁倬」との「人虎之交」①

『李徴と袁倬の再会』

本段落から最後まで、「虎」に「変身」しても・「監察御史」に「出世」しても、変わらない李徴と袁倬の「人虎之交」が展開される。第二段落は「その①」である。

李徴と袁倬の出会いも「科挙」なら、（袁倬についての記述がない）第一段落についての別れもまた「科挙」であった。第二段落で袁倬は「監察御史」として登場する。「袁倬が現在の地位、それに対する李徴の祝辞」が如実に物語るように、官吏監督官の「監察御史」はエリートコースの役職である。おそらく「天寶の末年」中央試験の「事前運動」の頃から「穏和な袁倬」は高評価を得ていたのであろう。李徴が都から遠い「江南尉に補せられた」のに対し、袁倬は長安あるいはその近辺の役人に任命され出世コースに乗ったと考えられる。この人事によって袁倬と隔絶された李徴の有様を描いたのが第一段落である。

袁倬は実直な役人である。「朝まだ暗い中に」「駅吏の言葉退けて、出発した」のは勅命を忠実に実行しようとした証とってよい。その袁倬が李徴に再会するや、人間が

虎になるという「超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった」ばかりか、「部下に命じて行列の進行をとどめ」、虎となった李徴と「対談する」。

再会は劇的である。空腹の「猛虎」となって躍りかかった李徴は、「残月の光」しかない「林中」で「監察御史」に「変身」しているにも拘わらず、その人物が「故人袁倬」だと分かったのである。さらに、袁倬はその「猛虎」が「李徴子」だと分かるや「恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した」のである。勿論「馬から下り」は袁倬が「監察御史」から「故人」に戻ったという比喩ではあるが、この時の状況を考えると「猛虎の隠れた叢に近づく」袁倬の行動は常軌を逸していると言わざるを得ない。ここは文字通り「人虎之交」の第一の場面であるが、両者の並大抵ではない「青年時代に親しかった者どうしの、あの隔てのない」交友関係を鮮明に描いている。

【第三段落】「変身①」Ⅱ「闇の呼び声」との「人虎之交」

『李徴の「内」なる「人虎之交」①』

『虎への変身と人間の李徴』

第一段落の最後にある李徴発狂の様子と、第三段落の冒頭にある「虎への変身」に至る記述とは、一方が客観的な

描写・他方は主観的な告白という対をなす。特に本段落で問題になるのは、「戸外で我が名を呼」ぶ・「闇の中からしきりに自分を招く」「声」である。この「声」が李徴の「内なる人虎之交」に働きかけたこと・李徴は「覚えず」反応してしまったことが、「人虎之交」による「変身^①」である。

ただ、この「声」については『人虎伝』・『山月記』ともにその正体を明かしてはいないため様々な解釈が生まれている。私は「超自然の怪異」として「素直に受け入れて」読めばいいと思っている。「まったく何事も我々には分からぬ」から『山月記』はおもしろいと思っている。全ての解明を押しつける数学の論証のような読書は窮屈である。

こんな作品がある。『太平広記』に同じく李景亮撰となっている『李章武伝』は「生前互いに情を交わした男女両性の、殊に女性の靈魂が、死後現世に現われて、かつての情人と未了の旧恨を遂げるという物語(前出『唐代伝奇』)」であり、「古来中国の小説にその例は乏しくない(同)」ものである。だとすると、「分からぬ」闇からの声の主「吾が名を呼ぶ者」は、「生前互いに情を交わした」「女性の靈魂」であり、『人虎伝』でいえば「焚殺」した「婦婦(未亡人)」の「呼ぶ」声である。この「声」に思わず誘惑されたことが「虎」への変身の動因であったということになる。

ただこれだと、あまりに「伝奇小説」の書き下し文・『人虎伝』の現代語訳になり『山月記』ではなくなってしまう。そこで中島敦は現代文小説家として、同じく「変身」の理由を明かしていないカフカ『変身』から発想したのではないか。「分からぬ。まったく何事も我々には分からぬ。理由も分からずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののだめだ」と創作したのではないか、と考える。

つまり、「1李徴はなぜ「虎」になったのか」も、「闇の中から」の「声」も、人智を超えた何者かの為業であり、「我々生きもの」には「分からぬ」ということである。また、同じ『古譚』中の『木乃伊』は「いつたい、獣でも人間でも、もとは何かほかのものだったんだろう。初めはそれを覚えているが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？」を連想させる。中島敦の創作を読み味わう作品としておもしろい。

この「虎への変身」を「虎になる病氣『軀病』」とする説がある。平成十四年二月九日、群馬大学公開講座「中島敦『山月記』を読む」で澤田雅弘氏の講演を興味深く拝聴した。「偶狂疾に因って殊類と成る 災患相仍つて逃るべからず」の新たな展開に新鮮な感動があった。(詳しくは

『山月記』をよむ（三省堂）」を御覧戴きたい」

因みに、第六段落「本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ、おれが人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを氣にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ」は李徴の「自嘲」なのであって、ここから「人間性・愛の欠如」によって「虎」になったなどというのは『源氏物語』を因果応報譚と読むのと同じである。『山月記』は道徳読本ではない。

【第四段落】〈外〉Ⅱ「袁修」との「人虎之交」②

〈変身②〉Ⅱ「詩人」李徴

『格調高雅・意趣卓逸な詩』と「即席の詩」

「故人」袁修が李徴の「内面」に働きかけたこと・李徴が「かつての李徴」に戻ったことが、「人虎之交②」による「変身②」である。「故人」袁修に向き合えたことによって李徴は「自己と向き合う」ことができた。「格調高雅・意趣卓逸な詩」に無くて、「即席の詩」の有るのは「自己と向き合う」李徴その人である。以下、「格調高雅・意趣卓逸な詩」と「即席の詩」について述べてみたい。

「格調高雅・意趣卓逸な詩」は「非常に微妙な点におい

て」欠ける」詩である。この「非常に微妙な点」を「人間性」や「愛」とするのは『山月記』読解上「非常に欠ける点」である。中野孝次氏は「国語教材を読む②」（泰流社）「中島敦『山月記』を読む」の中でこのように述べている。「各社の教材研究を見ると、どれもが、ここから李徴の生き方にたいして道徳的な批評を生徒に言わせようと狙っている。……教壇臭ふんぶん、道徳的な決めつけ方である」。その通りである。

「格調高雅・意趣卓逸な詩」について読み取らねばならない第一点目は、袁修不在中に作られたことである。この「詩作」は、「江南尉に補せられ」袁修と別れた後で、退官し「故山、號略に帰臥し」ていた時のものである。「一読して作者の才の非凡を思わせるものばかり」という記述からも、袁修がその「長短およそ三十編」の詩を読んだのはこの再会時が初めてであったことがわかる。

第二点目は、誰が「作者」ということである。もちろん李徴なのだが、「故人袁修」は「故人李徴」だとは「感じて」いない。「李徴の才」や「李徴の素質」といった記述はなく、「李徴の声」が「朗々と響い」ているのに、「才の非凡」な「作者」・「素質が第一流に属する」「作者」の「作」だと「感じていた」と書いてある。袁修が「李徴の詩」を読むのは、「青年時代」

上京した受験生の頃からだと考えられることは前述した。李徴は自分にはない詩才を持つ畏友であり、おそらくこの時分から袁慤は「李徴詩」の「読者」でもあったのである。だから「故人」であり「故くからの読者」でもある袁慤は、「一読し」た後「漠然と」「かつての李徴」の詩なのかと疑問を「感じていた」のだ。

第三点目が、「旧詩を吐き終わった李徴の声は」「自嘲」に変わることである。朗誦後李徴が「突然」変化するのは、「自己と」ではなく、「詩家としての名声」・「架空の読者」長安風流人士」に向き合って作ったものだからだ。「第一流の素質の非凡な作者」に「変身」して、「格調高雅・意趣卓逸」に製作した精巧なニセモノだから「自嘲」したので。李徴は「故山、號略」でただ独り「詩家としての」「自尊心満足」のため、「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」に苛まれる「自己」を埋滅すべく、「格調高雅・意趣卓逸」に詩を塗り固めていたのだろう。そして、「故くからの読者」袁慤ならばこそ「感じていた」のは、「格調高雅・意趣卓逸」から漏れ出す「非常に微妙な」ニセモノ李徴詩の「響」きだったのではないか。「自嘲」とは裏返った自尊心である。「嗤つてくれ。詩人に成りそなた虎になった哀れな男を」というのは、「自尊心満足」のために作った詩の呪縛が「岩

窟の中」の「虎」となっても解けないでいる、ということだ。以上から、「非常に微妙な点」とは「李徴が書いたのに、李徴を欠いた点」である。「欠ける」のは「作者李徴」その人である。

これに対し、「即席の詩」には「作者李徴」がいる。この詩は「まだ、かつての李徴が生きているしるしに」述べた作である。「しるし」は「徴」と書く。これは「即席の詩」が正しく「李徴の詩」であることを表している。「自嘲」から一変、李徴は「故人」袁慤に向き合うことによって、埋滅していた「自己」と向き合った。李徴が「人虎之交」によって「詩人」に「変身」した瞬間である。「即席の詩」は、「虎」となった今でも変わらない・「かつての」「青年時代」からの知己である「故い読者」袁慤に対して「述べ」た本物の「李徴詩」ということだ。

勿論詩作上の問題もあるが、「格調高雅・意趣卓逸な詩」が『山月記』中一編も出てこないのは「李徴を欠いた詩」だからだ。これに対して、「即席の詩」は「李徴が書いた詩」であり、描かれるのは「自己と向き合う李徴」である。

尾聯「此の夕溪山名月」に対し 長嘯を成さずして但だ嗚を成すのみ」から、中島敦は『山月記』という題名を創作したとされる。この尾聯は、詩の題材である「溪山」「名月」

に向かいながらどうすることもできない「詩人に成りそこな
って虎になった哀れな男」という「自嘲」ではなく、「故人」
袁孝に対し、「自己」と向き合った李徴の真情の吐露である。
この直後に「人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、
この詩人の薄幸を嘆じた」とある。「人々」が全員「李徴
詩の読者」になった、その時、李徴は「即席の詩」の作者
として「詩人」になったのである。そして、ここから「臆
病な自尊心・尊大な羞恥心」という『山月記』最大の創作
が生まれることになる。前出の駒田信二氏が「中島敦は
この詩のある」『国訳漢文大成』本で『人虎伝』という小
説を読んだことによって『山月記』を書くことが出来た」
というのは、この創作事情を述べたものと考察する。

ただし、「即席の詩」の七言律詩としての出来栄えには
疑問が残る。律詩の眼目である対句が見事であるとは言え
ず、特に頸聯「我為異物蓬茅下 君已乘軺氣勢豪」は整っ
ているとは言いがたい。（詳しくは『人虎伝』をほぼ全文採
用した大修館書店『古典B「漢文編」指導書』三五〇ペー
ジにある平仄を含めた解説を御覧戴きたい）

【第五段落】〈李徴の「内」なる「人虎之交」②〉

『臆病な自尊心・尊大な羞恥心』

第五段落では、袁孝との「人虎之交」によって「自己と
向き合う」李徴の真情の吐露が展開される。「臆病な自尊心・
尊大な羞恥心」が登場する本段落は『山月記』創作の要で
ある。この如何ともしがたい真情との孤独な葛藤が「李徴
の内なる人虎之交②」である。前にも述べたが、「臆病な
自尊心」を詩人になれなかった理由・「尊大な羞恥心」を
虎になった原因と読み分けられない方が無理なく読める。確
かに、そう読んだ方が分かりやすい所も有るのだが、両者を
一種の対句表現と捉えて、「表裏一体の李徴の真情」とす
るのが『山月記』読解にはよいと思う。少なくとも李徴の
内部で両者が区別されていたとは考えがたい。

「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」は、一方では李徴が「詩人」
になることを妨げ、さらに「虎」に変身させた強大な真情
あるいは「何か」である。しかし他方、李徴にしか作れな
い詩の中心的な動機・題材ともいえる。「即席の詩」がそ
の具体例である。ではあるが、李徴の「自尊心」は「臆病」
すぎるためその「自己」と向かい合えず、李徴の「羞恥心」
は「尊大」すぎるため「李徴詩」として作り発表すること
ができなかった。「詩人」と「猛獣」との「内なる人虎之交」、

この葛藤が「故山、號略」における李徴「詩作」の実態であつたと考えられる。友は自分を映す鏡だという。「袁儻」という鏡「不在の中、李徴が向き合っていたのは「詩家としての名」・「長安の風流人士」架空の読者」であり、畢竟「自尊心の満足」であつたろう。こうして生産されたのが「格調高雅・意趣卓逸」な詩、「故山、號略」の孤獨な工房で製作された精巧・精緻なニセモノ李徴詩である。

無論のこと「師に就」き「詩友と交わつて切磋琢磨」すれば、誰でも「第一流の作品」ができるわけではない。しかし、人を感動させる名作に共通するのは、「読者」に向き合い、この世でただ一人の「自己と向き合う」作者の姿勢である。「読者」に向き合わず「自己」とも向き合わない作はニセモノといつてよい。そこには唯一無二の「自己」という作者「も本物の「読者」もない。

「おれよりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者がいくらかでもいるのだ」。これは「乏しい才能」でも「自己」と向き合つた者が「堂々たる詩家となつた」ということだ。李徴の悲劇は才能が「ほとんど」「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」「に近い（密着した）もの」であつたことである。独りでは「自己」と向き合おうにも向き合えなかつたのだ。

「乏しい才能」ではなかつたことが、かえつて李徴が「自己と向き合う」妨げになつた。さらに「乏しい才能」の者にはできない「詩作」、「詩家としての名を死後百年に遺」するための「格調高雅・意趣卓逸な詩」製作を可能にしてしまつたのである。

次に問の「2」「3」について述べる。

「2李徴はなぜ「詩人」になれなかつたのか」というと、「自尊心満足」に向き合い、「自己」と向き合わなかつたからである。それ以上は「分からぬ」。「1李徴はなぜ「虎」になつたのか」と同じである。前出の中野孝次氏が「詩の女神は極度に嫉妬ぶかく、己れにすべてを献げた者にしか恩寵を与えようとせず、しかもその場合でもすべての者にそれを与えるわけではない」と述べているように、ミューズという人智を超えた何者かの気まぐれと言うしかない。これに理屈を付けると「教壇臭ふんぷん」となつてしまい『山月記』ではなくなる。

「3李徴はなぜ「詩人」になつたのか」というと、「故人」故くからの読者「袁儻に向き合うことで「自己」と向き合つたからである。その場にいた「人々」をも「読者」にした「即席の詩」直後の「詩人」という一語に尽きる。

第五段落の最後、「向ここの山の頂の巖に上り、空谷に

向かって吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。おれは昨夕も、あそこで月に向かつて咆えた。誰かにこの苦しみが分かってももらえないかと」という描写は、「即席の詩」を読んだ、就中、「此の夕溪山名月」に対し「長嘯を成さずして但だ嘯を成すのみ」を読んだ中島敦の凄まじい創作である。『山月記』という題名は切実である。

【第六段落】〈内〉と〈外〉との「人虎之交」

『李徴の葛藤と袁蓼との友情』

李徴が袁蓼に「我が妻子のこと」を依頼し、「自嘲的」に「人間」と「獣」との「内なる人虎之交」述べる。さらに袁蓼の性格をよく知っている李徴が示す最後の友情が描かれる。この「外との人虎之交」は『人虎伝』と同じである。

「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚」い李徴ほど

〈知己〉である「人」＝袁蓼

〈畏友〉である「虎」＝李徴

という交友関係＝「人虎之交」を必要とする人間はいない。それは袁蓼不在時の「詩作」の姿勢からも、袁蓼に対する「詩の伝録」のみならず「妻子」の生活の世話まで依頼する言葉からも明白である。

【第七段落】〈人虎之交〉終焉

『故人との別離・人間との決別』

袁蓼は「馬に上（の）った（『国訳漢文大成』『人虎伝』の読みが適切）。第二段落で「馬から下り」「故人」となった袁蓼が、「監察御史」に戻った後も変わらぬ「人虎之交」を描く、「悲泣」と「涙」の別離の場面である。

「虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった」。

最早ここは「丘の上」でも「道の上」でもない。「袁蓼はじめ一行は」またもや「息をのんで」そこにいる。『山月記』結びは、第五段落「向こうの山の頂の巖に上り…月に向かつて咆えた」と重層構造をなす、いわば二重絵巻の、中島敦究極の創作である。「躍り出た」その「咆哮」は、「虎」になった今、「故人」に対し自己と向き合った「詩人」の「胸を灼く悲しみ・苦しみ」の「長嘯」である。そして、袁蓼が「見た」のは「故人」との別離・「人間李徴」との永遠の決別である。

結末は実に凄絶である。しかし、これも李白の「黄鶴樓送孟浩然之広陵」と重なる。『故人西のかた黄鶴樓を辞し 烟花三月揚州に下る 孤帆の遠影碧空に尽き 惟だ

見る長江の天際に流るるを』には、友人孟浩然の乗った舟が見えなくなった後も、その場にたたずむ作者の姿を通して、孟浩然に対する深い友情が示されている（『中国文学小事典』高文堂）。李白と友人孟浩然の姿を彷彿とさせる、袁孝与李徴の「人虎之交」終焉である。

五 結びにかえて

「忘形之友」とは、外形が如何なるものであるうとも変わらぬ心と心で結ばれた親友の意である。『山月記』でいえば、「虎」に変身した李徴と「監察御史」に出世した袁孝の「青年時代」と変わらない友人関係ということになる。『山月記』を読むたびに気になっていたのは、なぜ「性、狷介」な李徴と「温和な」袁孝が互いに「最も親しい友」「我が友」という関係を結ぶようになったのかということである。「非常に微妙な点」や「詩人になれなかった理由」「虎に変身した原因」については、多くの書籍・参考文献で取り上げられている中で、この点については管窺が崇つて不思議なままであった。

今回たまたま大学・高校の現場で、幾つもの幸運によって「人虎之交」という切り口を思いつき、その視点で読み

通した。中島敦の創作を手探りでなぞるように読み直し、「忘形之友」という関係つまり「人虎之交」から、袁孝の〈畏友〉李徴⇓李徴の〈知己〉袁孝」という『山月記』における両者の「濃密な」交友関係を読み取ってみた。また、その読解を通して「非常に微妙な点」や「詩人になれなかった理由」「虎になった原因」等についてまとめてみた。改めて思ったのは、『山月記』は面白いということである。そして「作者中島敦」「主人公李徴」という創作の凄み・『山月記』という「結晶体の美しさ」に触れられるのは、遥か彼方だという実感である。

さらに『唐詩紀事』の「推敲」における賈島と韓愈の関係について思いが至ったのも一つの興味深い副産物である。「大尹韓愈に衝たる」不祥事は、かえって賈島にとつて「求知己」「閑節」という絶好の科挙事前運動であったことになる。今後の教材研究に役立てていきたいと思う。

教材分析・作品研究の基本姿勢は、今ここで講義・授業を受けている学生・生徒に向き合うことである。これは同時に自分の研究姿勢と向き合うことでもある。また授業の意義は、教員の言葉数や板書量ではなく、授業を共有する生徒の理解による。教室という学びの場にいる若き読書人に対して、「人虎之交」は『山月記』読解への一つの視座

に過ぎない。読み落としや思い違い等、御教示・御意見を頂ければ幸いである。

なお、『人虎伝』の「忘形之友」については改めて論じてみたいと思う。

参考資料・文献

○教科書・指導書

- ・「現代文B」（平二十五 数研出版）
 - ・「精選現代文B」（平二十五 東京書籍）
 - ・「高等学校 現代文B」（平二十七 三省堂）
 - ・「探求 現代文 改訂版」（平二十一 桐原書店）
 - ・「新探求国語総合 古典編」（平二十八 桐原書店）
 - ・「古典B 漢文編」（平二十五 大修館書店）
- ### ○全集
- ・「中島敦全集」（昭五十一 筑摩書房）

○「人虎傳」

- ・「晋唐小説（國譯漢文大成・文学部第十二巻）」

（大九 国民文庫刊行会）

○『李章武傳』

- ・「唐代伝奇 新釈漢文大系」（昭四十六 明治書院）

○参考書籍・事典

『山月記』を「人虎之交」で読む

- ・「ユリイカ 詩と批評 第九巻第九号」（昭五十二 青土社）
- ・「国語教材を読む②」（昭五十六 泰流社）

- ・『山月記』を読む」（平十四 三省堂）

- ・牧本千雅子「ひびきあう高校国語教室を求めて」

（平十四 友月書房）

- ・佐野幹「山月記」はなぜ国民教材となったのか」

（平二十五 大修館書店）

- ・宮崎市定「科挙」（昭三十八 中公新書）

- ・村上哲見「科挙の話」（昭五十五 講談社現代新書）

- ・松浦友久「漢詩―美の在りか―」（平十四 岩波新書）

- ・藤野岩友他「中国文学小事典」（昭五十三 高文堂出版社）

○研究発表資料

- ・群馬大学公開講座 中島敦『山月記』を読む」（平十三）
- 澤田雅弘「山月記」の裏側を覗く」

- ・「國學院大學中國學會第五十九回大会」（平二十八）

川合康三「山と向き合う」